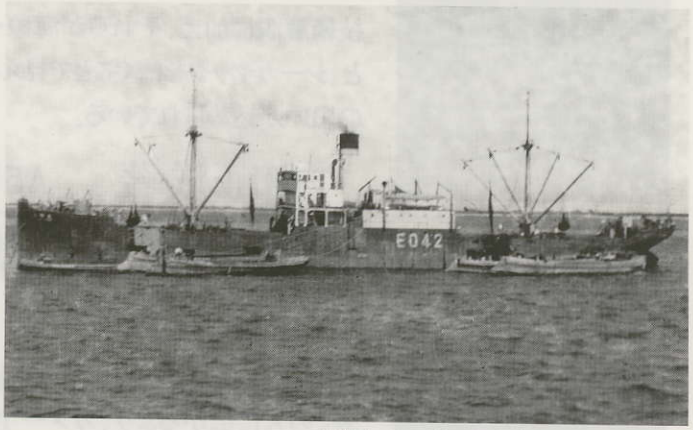
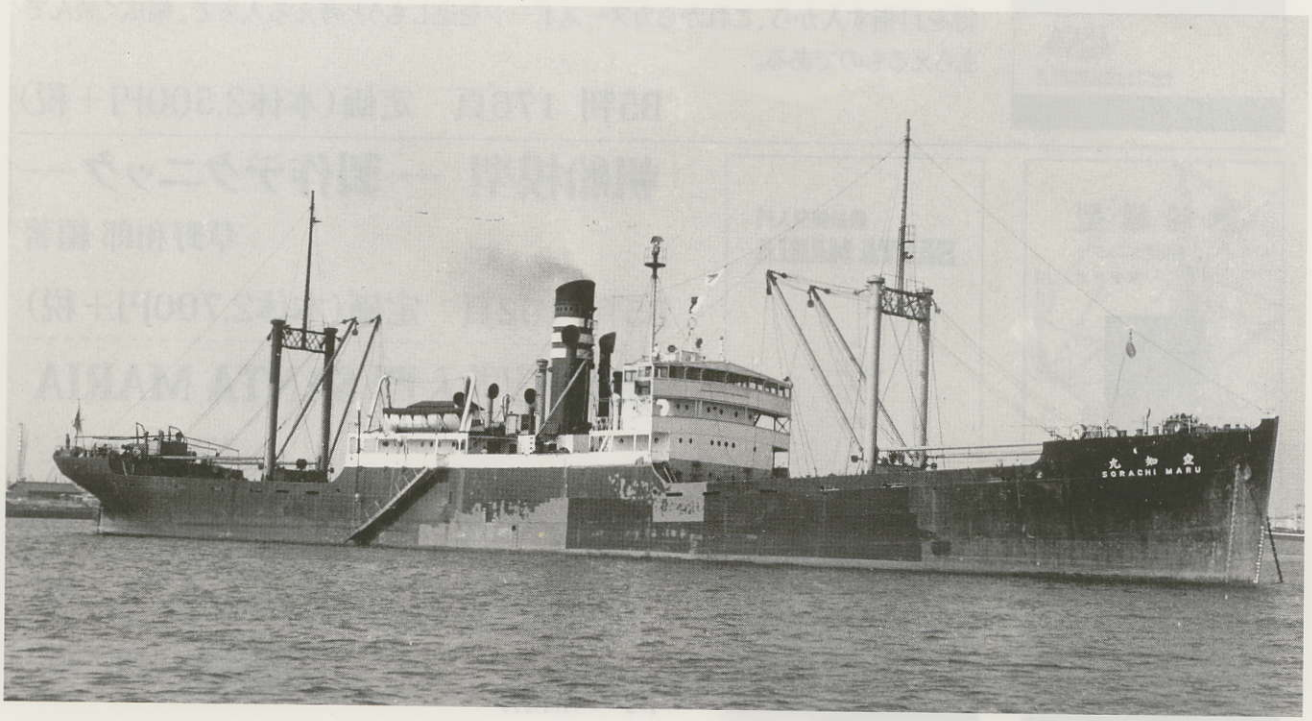
北海道沖からミッドウェー北方まで漂流した老朽貨物船を日本に曳航

文・山田廸生（日本海事史学会副会長）



栄順丸（1949年7月東京港で滝田清氏撮影）



栄順丸を曳航した空知丸（1956年8月横浜港で筆者撮影）

空知丸＆栄順丸

≪主要目≫ 空知丸：貨物船、三井船舶所属。総トン数4,107トン、重量トン数6,377トン、長さ107.1メートル、幅14.9メートル。主機3連成汽機1基、出力2,000馬力、最高速力12ノット。1930（昭和5）年三井物産造船部玉工場で竣工。1956（昭和31）年東洋海運に移籍、江戸川丸と改名。1965（昭和40）年解体／栄順丸：貨物船、東邦海運所属。総トン数2,142トン、重量トン数3,455トン、長さ81.7メートル、幅12.4メートル。主機3連成汽機1基、出力1,411馬力、航海速力7.5ノット。1916（大正5）年日本汽船の浦賀丸として浦賀船渠で竣工。1945（昭和20）年触雷沈没。浮揚修復。1961（昭和36）年解体

西太平洋を52日間も漂流

無人で漂流中の船齢35年の老朽貨物船「栄順丸」がミッドウェー北方で米国貨物船「キャロル・ビクトリー」（7600総トン）に発見されたのは1951（昭和26）年2月21日である。大暴風のため操船不能となり、釧路沖からSOSを発信したのが同年元日だから、52日間も太平洋を東へ流されたわけだ。

同船が空荷で川崎を出航し室蘭に向かったのは前年の12月28日。2日後、津軽海峡の東方で大時化に遭遇し、東に吹き流された。同船は燃料炭を節約しつつ暴風圏からの脱出を図ったが失敗。SOS発信に至った。

これを受信した海上保安庁の巡視船「みやけ」（450トン型）など4隻が次々と現場に到着し、曳航を試みたが失敗。やむなく同船の船主の東邦海運は、現場近くを北米に向け航行中の日鉄汽船の貨物船「豊永丸」（6859総トン、2A型戦標船）に船の監視と乗組員48人の救助を依頼するとともに、救助船として三井船舶から貨物船「空知丸」をチャーターした。「空知丸」は日本サルベージの技術者を乗せて川崎から現場へ向かった。

その9日前、東経160度付近で、乗組員全員は自船の救命艇で「豊永丸」に移乗した。荒天との闘いで疲労困憊していたうえ、燃料、清水、食糧が欠乏したためだ。「豊永丸」は予定を変え、1月12日横浜へ向かった。

「栄順丸」は無監視状態のまま西太平洋に放置された。そして前述のように2月21日、ミッドウェー北方で米国貨物船に発見されたのである。位置は日付変更線上の東経180度。経度で40度近く東へ流されたわけだ。

翌22日、「空知丸」が現場に到着し、27日に曳航を開始した。3月10日には洋上で食糧補給のために仕立てられた漁船と会合。同月14日浦賀沖に無事帰着した。帰着したとき、「栄順丸」は右舷に約10度傾き、船倉には170トンの海水が溜まっていたという。

東邦海運が同船救助に要した経費は莫大であり、保険金額を上回った。

短期間の海難で社船5隻を失う

東邦海運は1947（昭和22）年東京に設立された。前身は満鉄の子会社・大連汽船で、人材の中心は大連汽船東京支社と大陸から引揚げてきた役員・海陸員で構成された。残存船は船舶運営会が運航していたが、1950（昭和25）年4月の民営還元により東邦海運に返船された。その時点の所有船は18隻。敗戦後としては質量ともに十分な船隊であり、他社にくらべると有利な立場にあった。

ところが同年6月、ディーゼル主機の優秀船「山東丸」（3234総トン）が宮古島で座礁し沈没。これを皮切りに翌年3月までの短期間に5隻（山東丸、新屯丸、古城丸、第八快進丸、伊和丸）を海難で失うという悲運に遭遇。さらに保険金を上回る「栄順丸」の漂流事件による損害も加わり、東邦海運の戦後の発展を遅らせる結果となった。

なかでも「古城丸」（1684総トン）の沈没は悲劇的だった。同船は1950年12月、石炭約2000トンを積んで小樽から秋田県船川へ向かう途中、同月18日夜、青森県深浦沖で荒天のため沈没。40人の乗組員全員が船と運命をともにした。殉難碑が現在、深浦町の岡町地区御仮屋（おかりや）に建っている。

救助船として「栄順丸」をミッドウェー北方から浦賀まで曳航した三井船舶の「空知丸」は、共立汽船（北海道炭礦汽船の船を運航）の貨物船として昭和初期に三井物産造船部玉工場で誕生。日中戦争勃発の翌年、合併にともない北海道炭礦汽船（東京）に移籍。さらに戦時中、同社の船舶部門が三井船舶に吸収されたため三井船舶に移籍した。

船型は三島型。楕円型船尾を有する。船橋甲板室は船倉口によって前部と後部に2分されている。大正・昭和初期の貨物船によく見られる船型であるが、大正末期に出現した門型マストを備えているのが斬新である。

「栄順丸」曳航の5年後、東洋海運（東京）に移籍し「江戸川丸」と改名。1965（昭和40）年に解体され、35年の生涯を終えた。